

文 田辺とおる

「あらかわバイロイト」公演監督

ワグナー音楽祭「あらかわバイロイト」 「ヘンゼルとグレーテル」、その聴きどころ

下町から発信するワグナー音楽祭「あらかわバイロイト」は、昨年5月にワグナー最後のオペラ「バルシファル」で産声を上げ、今年「ワルキューレ」を公演。ほかに、ここ2年で独唱と管弦楽によるガラコンサートを3回公演した。そうでなくとも日本人によるワグナー公演は非常に少ないのに、よりによって下町あらかわ発。ベテランのドイツ人指揮者クリスティアン・ハンマー率いるイキのいい若手プロ集団のオーケストラに乗って、実績あるベテランとハイレベルの新人による混成キャストが熱唱を繰り広げている。好演に「下町ワグナー」というミスマッチの話題性が加わり、御蔭様で音楽界の御馴染になった。

その「あらかわバイロイト」今回は、巨匠の「バルシファル」製作にあたって楽譜浄書などの助手を務めたフンパーディンクの作曲になるメルヘンオペラ「ヘンゼルとグレーテル」をとりあげる。業界では俗に「ヘングレ」。



でも、「ヘングレなんて気安く呼ばないで欲しい！」のだそうだ。発言者はヴァイオリニスト。現在は某有名オケで弾く名手が東京芸大大学の頃、旅回り準備で必死に練習していたときの話だ。

歌手にとってはどの役も頗る楽しく、声楽的にも「清水の舞台から飛び降りる」程の曲では

ない。カルメン・ボエーム・椿姫などの名作オペラの主役は、まず全曲恙無く歌い切ることが課題だが、ヘングレは、そりゃ芝居もアクシオンも音楽表現も大変だけど、声楽的な難所続きではないのだ。

オケ団員は、そこが大違い。美しい音楽とチャーミングなメルヘンを支える管弦楽は豪華絢爛そのもの。観客が音楽の流れにうっとりとし身を任せる箇所こそ、至難の名人芸が要求されている。当然ながらリハ前の自宅練習も捻り鉢巻き。童話オペラ「ヘングレ」などと気楽に取り組めるものではなく、大交響曲並みの心構えだそう。

なるほど、さすがはワグナー晩年の高弟の作品。ベートーヴェンに始まりウェーバー・シューマン・ブラームス・ワグナーなど「これぞドイツ音楽」という華やかな管弦楽が開花した時代にあつて、それがメルヘンオペラに凝縮した超名曲こそ、ヘングレなのだ。「暖炉の前のバイロイト」という愛称もある。森を表すホルン、天使が舞い降りる弦合奏、フルオケが鳴り響く魔女の騎行（もちろんワルキューレの騎行のパロディだ）。実に美しく、表情豊かな音楽だ。児童劇にしては破格の贅沢と言えるだろう。

童話はしばしばオペラやミュージカルの原作になる。日本でも学校公演が創作劇団の重要な市場だから童話ミュージカルの新作は多い。ドイツでもグリム童話は多くの作家の手によっ

て、何度もオペラ・ミュージカルに編曲されている。

だからこそ、フンパーディンクの「ヘンゼルとグレーテル」の贅沢さに、着目して欲しい。そしてノーマット・原語・フルサイズで上演する「あらかわバイロイト」に期待して欲しい。普通は日本語台本（これが中々、鋭いドイツ語の語感でテンポよく運ぶ劇の感じがでない）、縮小編成のオケ、所々はカット版といった、学校公演のサイズとスタイルで演奏されているのだ。

主役歌手たちは日本語上演を数多く経験した芝居巧者・歌巧者ばかりだ。でも今回公演は、意気込みが違う。ワグナーで鍛えられたTIAAフィルも、ヘンゼルでクリスティアン・ハンマーの指揮と再会することに胸を膨らませている。

そんな「贅沢なメルヘン」を、正月の聴き初めに家族みんな楽しんでほしい。

Wagnerfestspiele
"Arakawa-Bayreuth"

